

「じぶんごと～探究活動の意味～」(岡山県立和気閑谷高等学校視察(20/12/21)報告)

研究推進部 吉田 究

学校創立350年。毎朝HRで論語の朗読。目標は「恕」の精神。

積年の片恋を果たし、18日(金)、岡山県立和気閑谷高等学校の卒業探究発表会を訪ねてきた。

学校のある環境は至って丹波と似ていて、既視感を覚える。全校生徒400名弱の、本校よりは規模の小さな学校だが、実行委員会を組織し、午前中を通して全校で臨む「探究発表会」はなかなか圧巻で、学ぶところの多い訪問であった。

私たち(研究推進部3名)が到着したのは9時半過ぎだったのだが、それより前に、実行委員の企画による「WAKE UP 2020」というクラス協議が行われていた。学年に応じテーマが与えられ、自分たちの成長と探究活動(授業名は「閑谷學」)がどうリンクしているのか、熱心に協議が行われたようであった。

9時40分からは個人発表。3年生が1・2年生の教室に向き、質疑を含めて7分の発表を行うというスタイル。1・2年次のグループでの探究活動を経て、3年次には進路希望に添ったテーマでの個人研究。「いいな」と思える発表は、やはり「個人の興味」「研究テーマ」「進路意識」がうまくマッチしたものに多く、そのような発表に触れると、この探究活動(閑谷學)が和気閑谷高校生にとって価値あるものであることが伝わってくる。

11時20分からは代表生徒の発表。今回、20のHR教室に分散して発表が行われたのはコロナ対策からだったのだが、「優秀」な発表には全1・2年生に触れてもらおうということで、この代表発表(5名)はオンラインで。スタジオから各教室への配信もすべて実行委員の生徒たちが中心となって運営を行っていた。

岡山大学の吉川幸准教授による講評のあと、閉会のあいさつは生徒実行委員長。この日の発表会が3年間の探究活動の集大成であることがひしひしと伝わって来る、良いあいさつであった。

我々は午後、「閑谷學」ご担当の安東先生から詳しくお話を伺ったのだが、その中で2回、そして生徒実行委員長の閉会あいさつの中でも1回聞かれたのが「じぶんごと」というワード。各地の高校の探究活動に詳しい大正大学・浦崎太郎教授に尋ねると、「岡山の高校では、『じぶんごと』という言葉は普通に認知されている」とのこと。なるほど。私も、大事なものは、世界で起こっている様々な事象に対してどこまで「じぶんごと」を広げられるかと常々思っていたので、これも大きな刺激であり、喜びでもあった。

和気閑谷高校を出たあとは、和気閑谷高校「創立350年」の起源となる閑谷学校へ。1670年(寛文10年)開学。武士と農民が机を並べて学ぶ、日本で最も古い「庶民のための学校」。併設される閑谷学校青少年センターの所長は、今春まで7年間の長きにわたって和気閑谷高等学校の校長を勤められた香山真一先生。訪問前に電話等ではお話ししたものの、今回は残念ながらお会いできなかったのだが、お会いするのは次に和気を訪ねる口実(?)として取っておきたいと思う。(その他、今回訪れることのできなかった上山集楽さんも、真庭市さんも!)

再度、和気閑谷高校の話に戻るのだが、「閑谷學」ご担当の安東先生は、「本校の職員には、探究が生徒の成長に活かないなんて思っている先生は誰もいない」と仰る。探究型の学び、あるいは教科横断といった言葉が聞かれるようになって久しい。先日、某大学がスマホ持ち込み可の大学入試を実施するという話が報じられたが、ドッグイヤーと言われる情報技術の進歩に伴い、学びのスタイルも日々変化している。しかし、その一方で、不易というか、変わらない、ブレない、基礎的な力というものもあるはずで、それを身に付けるのが探究活動だと私は考える。そのことを再確認した今回の視察であった。



### ■知探コースが取り組んできた成果を発表する場が「ゾクゾク」

研究推進部 土元 優一

例年の発表会は、現地まで行って会場の雰囲気を味わいながら発表していましたが、今年度は中止となったり、オンラインでの発表となったりしています。今週は、そんな機会が「続々」！

発表が近づくにつれ「緊張するうう」「全然まとまってなあい」という声が聞こえるようになってきました。しかし、いざ始まってみると、それぞれの画面に他校の生徒や大学の先生などの顔が映し出され、発表や質疑がいろんな画面上で進んでいく独特の雰囲気となっていきました。この雰囲気を「ゾクゾク感」と表現した生徒もいます。

### ○12月20日(日)「リサーチフェスタ2020」(甲南大学)

1年生からも参加を募り、合計10本の発表を行いました。このうち、2年生・西田さんが研究を進める『障がい者の自己肯定感を促す環境づくり・障がい者能力の自己開発能力についてのエスノグラフィー研究』が「ロジカルデザイン賞」を受賞しました。



### ○12月21日(月)「知の探究コース探究発表会」(「My Project Award 2020」リフレクションプログラム)

2年生(12本)、1年生(8本)の発表を行いました。開会では、3年生の増田さんが英語での口頭発表をしてくれました。その後、2年生のポスター発表、1年生の発表と続きました。今回は、「My Project Award 2020」の予選会(リフレクションプログラム)も兼ねての開催。杉岡秀紀 准教授(福知山公立大学)にも審査に参加いただき、それぞれの発表に対してアドバイスをいただきました。

審査の結果、『脱プラはなぜ困難なのか～「水分かれ」から考える海ゴミ～』が代表として選ばれ、「関西 summit」への出場権を獲得しました。

また、事前にエントリーしていたものからも書類選考を通過したものが3本あります。

『地域を元気にする特産品(甘酒お屠蘇の開発)』

『萌えるコミュニティづくりとストレス軽減を目指すライフスタイルの提案』

『格差を埋めろ!～何かしら出来るはずだ～』

代表班を含め、4つの班が関西 summit(2月6日(土))に出場します。



指導する我々教師側も、探究活動を進めていく中で、横や縦のつながりがどんどん強く、太く、そして、広が

っていくのを感じるとともに、探究活動の指導や発表の場で頑張る高校生たちを見て刺激を受けています。職員室内で「学びってそもそも…」「教師の役割って…」「今のことって本当に正しいのか…」などの話で盛り上がることも多々あります。そんな話をする場に参加していると、頭の中がいい意味で混乱し、「ゾクゾク」します。

答えがすぐに出ないモドカシサはありますが、「今の自分ならこう考える」と「じぶんごと」で考え続けています。前に同じ内容で考えたこととはまた違った考えが出てくるのも面白い！